

Who Is the "She"?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4078

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



この“she”は誰か

栗原 裕

Hemingway の短篇 “Cat in the Rain” のストーリーの分岐点である。雨の降るなかを、アメリカ人の妻が滞在しているホテルの窓から見かけた猫をつかまえに降りて行ってみると、猫は姿を消していた。

With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.

“Ha perduto qualche cosa, Signora?”

“There was a cat,” said the American girl.

“A cat?”

“Si, il gatto.”

“A cat?” the maid laughed. “A cat in the rain?”

“Yes,” she said, “under the table.” Then, “Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.”

When she talked English the maid’s face tightened.

“Come, Signora,” she said. “We must get back inside. You will be wet.”

“I suppose so,” said the American girl.

引用した二つのパラグラフの後半部分，“When she talked English the maid’s face tightened.”という文中に出る“she”は誰のことか。メイドか、それともアメリカ人の妻（引用部分では American girl となっている）か。もちろん、普通に英語を英語として読む人なら，“she”は maid であると読むであろうと思う。

Hemingway の文章は平易な語彙と単純な構文で物語を仕組み、独特の含意と叙情の効果を上げる。それを好都合と考えて、文部省検定済高等学校外

国語科用 Reading 教科書に利用した。Reading 用素材のなかの数少ない文学的色彩を呈する一篇になっていた。この件については、教師用指導書にもよけいなことは記さず、たんに、つぎのように書き込んでおいたのであった。

メイドが妻にホテルに戻るように促す際、あまり英語が得意でないために話すのに緊張している様子である。When ... の従属節が主節に先行し、メイドを指す she が先行した。

e. g. *While he was walking along the street, Tom saw a strange thing.* (通りを歩いているとき、トムは奇妙なものを見た)

その教科書というのは、斎藤武生、栗原裕、千葉修司、本田晶治、高市美千佳、Nicholas J. Teele、山本敏子、開拓社編集部共著作編集の *New Harmony Reading* (開拓社、1995 検定済 1996 使用開始) である。

この教科書を使っている都内のある高等学校で聴講生として出席しているという婦人から出版元の開拓社経由で質問があった。教室でこの“she”はメイドであると教えられたが、自分の感じではアメリカ人の妻のように思えるのだが、いかがか、というのであった。この婦人は、あわせて、新潮社にも接触し、Hemingway の短篇集を翻訳している高見浩氏にも質問を向けたのであった。

いま、この個所の日本語訳を三種類引いてみる。

- (1) 女中に傘をさしてもらいながら、彼女は砂利の小道を部屋の窓の下まで行った。賭博台はそこにあり、雨に洗われて明るい緑いろになっていたが、猫はいなかった。彼女は急に気が抜けてしまった。女中が顔を上げて彼女を見た。

「Ha perduto qualche cosa, Signora? (なにかおなくしになったんですの、奥さま?)」

「猫がいたの」とアメリカの女はいった。

「猫?」

「Si, il gatto (ええ、猫よ)」

「猫?」女中は声をあげて笑った。「この雨に猫ですか?」

「そうよ」と彼女はいった、「台の下にいたのよ」、それから、「とって

もほしかったの。とつても子猫がほしかったの」

彼女が英語で話すと、女中の顔はまじめになった。

「さあ、奥さま」と彼女はいった。「おうちに入りましょう。濡れますわ」

「そうね」とアメリカの女はいった。

北村太郎訳「われらの時代に」(高村勝治・北村太郎・龍口直太郎・鮎川信夫・伊藤尚志訳『ヘミングウェイ——現代アメリカ文学全集7』荒地出版社, 1957)

- (2) 傘をさしかけるメイドといっしょに砂利道を歩いて部屋の窓の下へきた。賭博台は雨に洗われ緑もあざやかにそこにあったが、猫の姿はなかった。彼女は急にがっかりした。メイドは彼女を見あげた。

「ア・ペルドウト・クワルク・コーザ シニョーラ何か落しものでもなさったのですか、奥さま？」

「猫がここにいたのよ」アメリカの女は言った。

「猫？」

「シ イル・ガットええ、猫よ」

「猫がですか？」メイドは笑った。「猫が雨のなかに？」

「そうよ」彼女は言った。「この台の下に」それから彼女は言った。「あの猫、とてもほしかったのに。子猫がほしかったの」

英語をしゃべると、メイドの顔が緊張した。

「さあ、奥さま」とメイドは言った。「もどりましょう。ぬれますわ」

「そうね」アメリカの女は言った。

大久保康雄訳『ヘミングウェイ短編集(-)』(新潮文庫, 1970)

- (3) メイドのさしかける傘に守られながら、彼女は砂利道を進んでいって、自分たちの部屋の窓の下まできた。テーブルがあった。雨に濡れて鮮やかな緑色に映えていたが、猫の姿は消えていた。急に、失望感に襲われた。メイドが彼女を見あげた。

「ア・ペルドウト・カルケ・コサ, シニョーラ (何かおなくしになったんですか、奥さま)？」

「猫がいたのよ」若いアメリカ娘は言った。

「猫？」

「シ、イル・ガット（ええ、猫が）」

「猫がですか？」メイドは笑った。「この雨のなかに猫が？」

「ええ、そうなの。このテーブルの下にね」言ってから、「ああ、ほしかったわ、あの猫。あたし、子猫がほしかった」

彼女が英語で話すと、メイドの顔に緊張の色が浮かんた。

「いきましよう、シニョーラ」メイドは言った。「中にもどりましよう。お濡れになりますから」

「ええ、そうね」若いアメリカ娘は言った。

高見浩訳『われらの時代・男だけの世界—ヘミングウェイ全短編集1』（新潮文庫、1995）

これから明らかに見てとれることは、三人の翻訳者全員がこの“she”をアメリカ人の妻であると読んでいることである。この点では、高橋正雄訳（ヘミングウェイ全集、三笠書房、1964）、石一郎訳（新集世界の文学、中央公論社、1968）、谷口陸男訳（世界文学大系、筑摩書房、1971）、宮本陽吉訳（世界文学全集、講談社、1976）も変わらない。わたくし自身もそのように読んで疑問に思わなかったことがあるけれども、これは違うであろう。それなら、英語の原文は二とおりの読みを許容する曖昧（多義）の例にあたるかと言えば、それも言えないであろう。

たとえば、この短篇の冒頭の一文を見よう。“There were only two Americans stopping at the hotel.”を英語の呼吸どおりに日本語に移せば「そのホテルにはアメリカ人が（「は」でなく）二人しか泊まっていなかった」となるであろう。冒頭文であるがゆえに、この英文だけ見れば曖昧（多義）である。このホテルには、①アメリカ人二人しか泊まり客がいなかったのか、②ほかにも泊まり客がいたが、そのなかにアメリカ人は二人しかいなかったのか、これだけ見たかぎりでは決めかねる。けれども、冒頭第二文を読めば、その段階で①の読みは拒絶され、②の読みが選択されることになる。確かに、そういう意味で、この短編の冒頭第一文は曖昧（多義）である。それにもかかわらず、Hemingwayが冒頭第一文で曖昧（多義）の効果を積極的に利用していたかとなると、そうは言えないであろう。

同じように、いま問題にしている“When she talked English the maid's face tightened.”についても、この文だけを取り出して読めば、二とおりの読

みができるかもしれない。すなわち、①“she”がアメリカ人の妻であるのか、②“she”がメイドであるのか決めかねる。けれども、ここでも、また、前後の文脈によって、一方の読みが選ばれ、他方の読みが退けられるにちがいない。Hemingwayがここでもまた曖昧（多義）の効果を狙っていたなどと考えるわけにはいかないからである。

さて、すでに白状したように、わたくし自身もまた三人の翻訳者および質問者と同じ読み方をしたこともあった。どうも、これは日本人にとって自然なあまりやすい受けとめ方なのではないかと考えられる。いきなり外国語（別に外国語でなくてもいいが）をまくし立てられて、思わず顔の筋肉が引きつるという経験なら、ほとんどわれわれの共通に持つ体験だからである。

彼女が英語で話すと、女中の顔はまじめになった。（北村）

英語をしゃべると、メイドの顔が緊張した。（大久保）

彼女が英語で話すと、メイドの顔に緊張の色が浮かんだ。（高見）

いずれの翻訳も、われわれの持つ共通の体験の脈絡の上にメイドの顔の緊張を理解している。アメリカ人の妻はこれより前にも英語で話しているし、メイドも英語を口にしていないわけでないから、二人の対話の最後の、思わずアメリカ人の妻の口を突いて出てきたような“*Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.*”という英語がmaidの顔の緊張を引き起こした直接の原因であると考えているとしていい。

ここまでのところで生ずる疑問を記しておこう。場所はイタリアの小さなホテルで、人物はアメリカ人夫妻と宿の主人とメイドの四人である。言うまでもなく、宿の主人とメイドはイタリア語を、アメリカ人夫妻は英語を母語としていていると考えられる。そういう状況ではあるが、翻訳者たちの読みはメイドの英語運用能力を過小に評価しているということはないであろうか。

メイドがアメリカ人の妻に向かって最初に発したことは英語でなくイタリア語であった。先の引用の直前である。

Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A man in a rubber cape was crossing the empty square to the café. The cat would be around to the right. Perhaps she could go along under the eaves.

As she stood in the doorway an umbrella opened behind her. It was the maid who looked after their room.

“You must not get wet,” she smiled, speaking Italian. Of course, the hotel-keeper had sent her.

アメリカ人の妻の背後から傘を差しかけて言うことばは、“‘You must not get wet,’ she smiled, speaking Italian.”とあるように、そのことばは英語で表記されているが、イタリア語であった。そのつぎに発することばは、最初の引用に“Ha perduto qualche cosa, Signora?”と今度はイタリア語で表記されているとおり、やはりイタリア語であった。それに対して、アメリカ人の妻は“‘There was a cat’”と英語で答えている。このあたりで、メイドは別に英語を聞いても緊張する気配はない。アメリカ人の妻のことばを反復して、“‘A cat?’”と言い、さらには“‘A cat in the rain?’”とまで言って笑うのである（アメリカ人の妻は“‘Si, il gatto.’”とイタリア語で表現してやる心遣いも見せるけれども）。そして、そのあとメイドは“‘Come, Signora’”“‘We must get back inside. You will be wet.’”と英語で言っている。さらに、物語最後の“‘Excuse me,’”“‘The padrone asked me to bring this for the Signora.’”というメイドの口上もちゃんとしている。このことは、メイドがこの程度の日常の職業上の英語の運用にいちじるしい不自由を見せていないことを示している。このことが一つ。もう一つは、かりにアメリカ人の妻が思わず口走ったことばであるにしても、“‘Oh, I wanted it so much, I wanted a kitty.’”が聞きとりそこなうような難解な英語ではまったくない、ということである。

この二つの事実から、アメリカ人の妻が英語をしゃべったとき、メイドの顔が緊張しなければならない理由が見つからないのである。外国語をまくしたてられて頬が引きつるという、われわれに共通の体験はこの場合のメイドには当てはまらないように思える。この疑問はひとまずわきに置いておこう。

いま注意したいのは、アメリカ人の妻が思わず口走ったことばでこのパラグラフが終わっていることである。そして、段落があって、改行。そのつぎのパラグラフが問題の一文で始まるのである。もし、問題の一文“‘When she talked English the maid’s face tightened.’”が、一つ上のパラグラフの最後の二文をアメリカ人の妻が口走ったときのメイドの反応を叙述した文であるとするならば、このメイドの顔が緊張するという反応はアメリカ人の妻のこと

ばを聞いたときの間を置かぬ瞬間的な反応であったはずであるから、この叙述は段落、改行などせずに、アメリカ人の妻のことばの直後に続けなければならない。続けるのが自然である。それは、ちょうどさらに一つ前のパラグラフ（二番目の原文の引用がそれ）の末尾の“Of course, the hotel-keeper had sent her.”の一文がそうであったのと同じようになるのが自然である。

ところが、問題の一文はそうになっていない。段落があって、この一文をもって新しくパラグラフが起こされているのである。ということは、この一文は直前のパラグラフの末尾の説明ではなくて、このパラグラフで新しく提示される事柄の説明でなければならない。すなわち、直後に続くメイドのことばを引き出すための説明なのだ。メイドが“Come, Signora.”“We must get back inside. You will be wet.”とまさしく英語で表現するときの様子を説明していると見るしかないはずである。

ここで確認できることは、Hemingway, “Cat in the Rain”のすべてのパラグラフにおいて、まず説明があって、それに引き出されるように会話が続くという構成になっていることである。物語にははじめ地も図もなかった。その物語のなかに会話が結晶し前面に浮かび出たとき、はじめて残余の部分が退いて地となった。地の文と会話の文が分裂するとともに、それぞれの機能も分担されることとなった。地の文は説明であり、それが会話の文を引き出したり引き立てたりすることになる。相対的に言えば、説明が話を少しずつ（あるいは劇的に）進行させるとすれば、会話は場面を再現するのがその働きである。Hemingwayの場合も例外でなく、そもそも小説文のパラグラフの成り立ちというものがそうなのである。だから、パラグラフの頭に説明があったら、それは続く説明やら会話やらを引き出すための説明以外のものではないのである。

とくに地の文と会話の文の関連に注意しながら、改めて、Hemingway, “Cat in the Rain”のパラグラフの姿を眺めてみる。全体は長短19のパラグラフでできている。本稿末尾に付した原文とパラグラフ・ナンバーを参照されたい。

第1パラグラフ 場面設定のためのやや長目の説明で、対話はなし。

第2パラグラフ アメリカ人の妻が窓から外を見、その視線の先に猫が捉えられたという説明で、それによって夫との対話が引き出される。

- 第3パラグラフ 短い、夫の姿勢とこの件へのかかわり方を象徴するような説明と、その姿勢で発せられる夫のことば。
- 第4パラグラフ 妻の移動とともにその視線に捉えられた宿の主人の説明。そのあとに主人との対話が続く。
- 第5パラグラフ アメリカ人の妻が宿の主人に対して抱く好感が妻の立場から説明される。対話なし。
- 第6パラグラフ 好きだなあと思いながら、ドアを開けて外を見る。第2パラグラフと同じで、あとはその視線の先に捉えられた光景と内面の思惟が説明されたあと、背後に傘が開き（振り返ると）メイドであったと説明が続く。メイドのことばが続くのは期待されるとおり。宿の主人が遣わしたのだ、というのはアメリカ人の妻の心中の思惟。
- 第7パラグラフ 妻の移動とともに視線も移動。説明では、猫がいなくなっていて、急に気落ちしていると、メイドが（心配そうに）見上げている。（顔が合うと）メイドは当然気づかいのことばを発することになる。そして、対話。このパラグラフは、アメリカ人の妻が思わず口に出してしまったような“*Oh, I wanted it so much, I wanted a kitty.*”で終わる。
- 第8パラグラフ 先行する第7パラグラフは区切りがついている。問題の一文が、第7パラグラフの末尾にでなく、この位置にあることが決定的なのである。もちろん、Hemingwayがうっかり書き間違えたのだなどというのは邪道である。この一文は続くメイドのことばに対する説明になっていなければならない。
- 第9パラグラフ 帰りは早いと言うべきか、砂利道を戻る、事務室前を通る（アメリカ人の妻の反応）、部屋に戻る（夫ジョージの反応）と盛りだくさんの説明のあと、夫のことばが引き出され対話。
- 第10パラグラフ ベッドに腰をかけるという説明のあと、妻の一方的な心情吐露。
- 第11パラグラフ ただ一文で一パラグラフをなす。夫の反応がきわ立つではないか。
- 第12パラグラフ 鏡台の前に坐って髪型について点検するという説明によって、夫への問いが引き出される。
- 第13パラグラフ 夫が妻のうなじを見るという説明によって、夫の答えが引き出される。

- 第14パラグラフ 夫は姿勢を変えて、もう一度問いに答える。
- 第15パラグラフ 妻は手鏡を置いて窓辺に行き外を見るという説明とともに、視線の先の雨についての描写があり、妻の思いがことばになって、対話。
- 第16パラグラフ まだ外を見ているという説明とともに、視線の先の外の時間の経過と雨の持続が伝えられ、妻の猫に対する諦めきれない気持がことばになる。
- 第17パラグラフ 夫と妻のついに寄り添わないことを示す説明。対話なし。
- 第18パラグラフ ドアにノック。夫の返事が引き出されるとともに、書物から顔を上げたという説明が加わる。
- 第19パラグラフ 顔を上げた目の先に、その視線に捉えられたメイドの姿がある。当然、メイドの口上が引き出されなければならない。

以上のように、“Cat in th Rain”のパラグラフのあり方を一つ一つ点検したときに、明らかになるのは以下のようなことである。そのすべてにおいて、説明をなす地の文があって、それに導き出されるようにして人物のことが出現すること。説明をなす地の文だけあって人物のことが欠如したパラグラフはあっても、その逆のパラグラフはないこと。したがって、問題の一文を含む第8パラグラフだけが例外であるとは考えにくいのである。パラグラフというもののあり方からすると、問題の一文の“she”はメイドであると読むしかないことになる。この一文は続くメイドのことが導き出す説明になっていなければならない。そのためには、これはメイドが英語をことばに出して言うときの様子を語っていると読むのが自然で理にかなっている。当然、このことは、日常の職業上の英語の運用にメイドはいちじるしい不自由を覚えられないにしても、やはりメイドにとって英語は外国語であって、聞くよりも話すときにより緊張を強いるものであったことを語っていることになるであろう。似たような趣旨のことをイタリア語で言うときにはほほえみながら言ったのに（第6パラグラフ）、英語で言うときには顔が緊張する（第8パラグラフ）というのは、自然でわかりやすい状況でもあろう。

蛇足ながら、同一名詞句の代名詞化について注釈をつける。

- a) She was eleven when Jane came to our home.
- b) When Jane came to our home, she was eleven.
- c) When she came to our home, Jane was eleven.

a) の文は she と Jane が別人物であるなら文法的であるが、同一人物であるなら非文になる。b) c) の文は she と Jane が同一人物であっても文法的である。もちろん、文脈条件が揃えば、she と Jane が別人であっても差し支えない。先に代名詞 (she) が来て、あとで名詞 (the maid ['s face]) が来るのは、先に来る代名詞を含んでいるのが従属節であるなら、英語では文法的で、なんら不自然でない。

それでも、この“she”がアメリカ人の妻を指していると読もうとするとどういうことになるか。まず第一に、パラグラフの感覚と存在を無視することが必要である。第二に、メイドの英語運用能力を過小に評価することが必要である。第一については、パラグラフの感覚は無視することができても、問題の一文を含むパラグラフがいまあるようにあるという存在自体はどうしようもない。ただ、感覚のほうが増えれば、存在も変化できるであろう。第二については、強弁することで過小評価を実現してしまうことがある。

メイドの英語運用能力を極端に過小評価するのが翻訳者の一人、高見浩氏である。すでに見たように、メイドの最初のことは英語で表記されていたが、実はイタリア語でなされたものであったことは、説明にあるとおりである。それは読者が英米人であることを考慮してなされた表現だと言うのだ。そして、高見氏は、このメイドはたぶん英語が話せないと考えている。つぎにメイドが口にすることばはイタリア語で表記されていた。そして、このイタリア語の問いかけに対して、イタリア語の話せるアメリカ人の妻のほうも一貫してイタリア語で応答していたと解すべきだと言い、問題の個所にいたって、急に猫に寄せる思いがこみあげてきて、ついイタリア語で話すのを忘れて、感情のほとばしるままに母語の英語で言ってしまったのだ。これが、この一件の最初の質問者に示された高見氏の解釈であった。“she talked English”の English を無視できないために、それ以外に目に余る歪曲を加えることになった。

いくらなんでも、そこまでは付いて行けないであろう。先の質問者が知り合いのアメリカ文学研究者に相談したところ、与えられた解釈はこういうも

のであった。こちらは、メイドの英語運用能力を過小に評価できないことを知っているのである。まず、アメリカ人の妻の発した最後の二文はメイドに話しかけたのでなく思わず口を突いて出てきてしまった一人言であるとした上で、そういう話しかけるのでない発言を示すのが“she talked English”という表現だと言い（そんなことはないと思うが）、この個所でアメリカ人の妻がいかに幼稚そうに「そのネコがスゴク欲しかったのよねー」と言ったのを聞いて、メイドは、まあ、二階から何か大事なものでも落とすから、この激しい雨のなかに出てきたのかと思ったら、コネコが欲しいですってど、顔を陰しくさせたのではないかというのだ。そもそも、これでは原文の“she talked English”がたんに she talked と同じで English が無視されてしまっている。その上、メイドの顔の緊張が雨のなかになんか猫探しに付き合わされて陰しくなったものだというのも、いかにもってまわった読み込みでわざとらしく、うそっぽい。

最後に、角度を変えて、“she”がメイドであると読まれないようにするにはどうしたらいいかと考えてみる。当然、“When the American wife talked English, the maid’s face tightened”とすればいい。そして、そうなると、この文には“Come, Signora . . .”というメイドのことばが明らかに繋がらなくなってしまう。浮いてしまうのである。そして、書き換えた文のほうも、前のパラグラフ末尾に移動しなければ、これまた浮いてしまう。書き換えてみることは、当該文の位置と関係を明確にしてくれるであろう。

問題の一文を最初に呈示したように読むことは、われわれの教科書の共著作編集者たち、とくに Nicholas J. Teele 同志社女子大学教授にも了解されていた事柄であった。その上、今回、同僚の心安さから Ronald Thornton 大妻女子大学教授の判断も仰いだ。わたくしの「この“she”は the American wife か the maid か」という二者択一の問いに対し、「the maid だ」という返事。さらに「Japanese translations のほとんどが she を the American wife と解釈しているが」という問いに対して、やはり、そうではないとして、つぎの趣旨の理由をあげてくださった。

- 1) メイドは主としてイタリア語を、アメリカ人妻はほとんど英語をしゃべる。メイドの顔が緊張するのはメイドが英語をしゃべらなければならないとき。
- 2) メイドにとって英語を話すほうが英語を聞くよりもストレスがかかる

であろう。

3) 問題の“she”は the maid と同一文中に生じている。

以上、記して、とくに感謝の意を表す。

Cat in the Rain

- ① THERE WERE ONLY TWO AMERICANS
 stopping at the hotel. They did not know any of the people they passed on the stairs on their way to and from their room. Their room was on the second floor facing the sea. It also faced the public garden and the war monument. There were big palms and green benches in the public garden. In the good weather there was always an artist with his easel. Artists liked the way the palms grew and the bright colors of the hotels facing the gardens and the sea. Italians came from a long way off to look up at the war monument. It was made of bronze and glistened in the rain. It was raining. The rain dripped from the palm trees. Water stood in pools on the gravel paths. The sea broke in a long line in the rain and slipped back down the beach to come up and break again in a long line in the rain. The motor cars were gone from the square by the war monument. Across the square in the doorway of the café a waiter stood looking out at the empty square.
- ② The American wife stood at the window looking out. Outside right under their window a cat was crouched under one of the dripping green tables. The cat was trying to make herself so compact that she would not be dripped on.
 “I’m going down and get that kitty,” the American wife said.
 “I’ll do it,” her husband offered from the bed.
 “No, I’ll get it. The poor kitty out trying to keep dry under a table.”
- ③ The husband went on reading, lying propped up with the two pillows at the foot of the bed.
 “Don’t get wet,” he said.
- ④ The wife went downstairs and the hotel owner stood up and bowed to her as she passed the office. His desk was at the far end of the office. He was an old man and very tall.
 “*Il piove,*” the wife said. She liked the hotel-keeper.

“*Sì, sì, Signora, brutto tempo. It's very bad weather.*”

- ⑤ He stood behind his desk in the far end of the dim room. The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands.
- ⑥ Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A man in a rubber cape was crossing the empty square to the café. The cat would be around to the right. Perhaps she could go along under the eaves. As she stood in the doorway an umbrella opened behind her. It was the maid who looked after their room.
- “You must not get wet,” she smiled, speaking Italian. Of course, the hotel-keeper had sent her.
- ⑦ With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.
- “*Ha perduto qualche cosa, Signora?*”
- “There was a cat,” said the American girl.
- “A cat?”
- “*Sì, il gatto.*”
- “A cat?” the maid laughed. “A cat in the rain?”
- “Yes,” she said, “under the table.” Then, “Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.”
- ⑧ When she talked English the maid’s face tightened.
- “Come, Signora,” she said. “We must get back inside. You will be wet.”
- “I suppose so,” said the American girl.
- ⑨ They went back along the gravel path and passed in the door. The maid stayed outside to close the umbrella. As the American girl passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme importance. She went on up the stairs. She opened the door of the room. George was on the bed, reading.
- “Did you get the cat?” he asked, putting the book down.
- “It was gone.”
- “Wonder where it went to,” he said, resting his eyes from reading.
- ⑩ She sat down on the bed.
- “I wanted it so much,” she said. “I don’t know why I wanted it so much. I wanted that poor kitty. It isn’t any fun to be a poor kitty out in the rain.”
- ⑪ George was reading again.
- ⑫ She went over and sat in front of the mirror of the dressing table looking at herself with the hand glass. She studied her profile, first one side and then the other. Then she studied the back of her head and her neck.

"Don't you think it would be a good idea if I let my hair grow out?" she asked, looking at her profile again.

⑬ George looked up and saw the back of her neck, clipped close like a boy's.

"I like it the way it is."

"I get so tired of it," she said. "I get so tired of looking like a boy."

⑭ George shifted his position in the bed. He hadn't looked away from her since she started to speak.

"You look pretty darn nice," he said.

⑮ She laid the mirror down on the dresser and went over to the window and looked out. It was getting dark.

"I want to pull my hair back tight and smooth and make a big knot at the back that I can feel," she said. "I want to have a kitty to sit on my lap and purr when I stroke her."

"Yeah?" George said from the bed.

"And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a kitty and I want some new clothes."

"Oh, shut up and get something to read," George said. He was reading again.

⑯ His wife was looking out of the window. It was quite dark now and still raining in the palm trees.

"Anyway, I want a cat," she said, "I want a cat. I want a cat now. If I can't have long hair or any fun, I can have a cat."

⑰ George was not listening. He was reading his book. His wife looked out of the window where the light had come on in the square.

⑱ Someone knocked at the door.

"*Avanti*," George said. He looked up from his book.

⑲ In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat pressed tight against her and swung down against her body.

"Excuse me," she said, "the padrone asked me to bring this for the Signora."